



デイケアサービスを利用する
お年寄りの送迎も担当してい
る研修員のウォンモさん(左)

PLAYERS

国際協力の担い手たち

社会福祉法人 佛子園

全ての人が共に暮らせる社会へ

老若男女、障害の有無に関わらず、みんなが支え合う社会を目指し、
斬新な取り組みを進める石川県の社会福祉法人佛子園。
その理念が今、ブータンへも広がっている。

障害があっても 生き生きと働ける場所を

ソーシャルインクルージョン。健常者、障害者、お年寄り、子どもなど、全ての人が心豊かに暮らせる社会のこ
とだ。その実現を目指す社会福祉法人

佛子園は、戦後、身寄りのない子どもを育てた石川県白山市の行善寺をルーツに、県内で福祉施設を運営して55年になる。

日本海を望む能登半島の東部に、丁寧に手入れされた庭と洋館がある。その名も「日本海倶楽部」。佛子園が運営

する福祉施設の一つだ。地ビール工場とレストランがあり、この地ならではの味を目当てに立ち寄る観光客も多い。
ここでは、自閉症やダウン症などさまざまな知的障害のある人々が暮らし、働いている。「こんにちは！」と明るくあいさつしてくれた彼らは、地ビール



日本海倶楽部の施設長、清水さん(左)は「福祉が地域貢献にもつながることが理想」と、地域の人々との交流にも力を入れている

の瓶詰めやレストランの調理補助などを担当する。

「障害があっても、地域と関わりながら働ける場を目指してつくりました。でも、ただ福祉施設に遊びに来てくださーい!と言っても難しいですね?そこで、来てもらえるための「仕掛け」がクラフトビールなのです」。日本海倶楽部の施設長を務める清水愛美さんはそう話す。

さらに驚いたのが、日本人スタッフに混ざってきばき働くブータンからの研修員、ゲデン・チョフェルさんの姿だ。実は、佛子園の雄谷良成理事長は青年海外協力隊OB。言葉も文化も違う開発途上国では、人間的な器を大きくしておかないと相手の気持ちを拾うことはできない。それは福祉の仕事にもつながると、佛子園では毎年職員
の海外研修を実施し、2010年の行き先はブータンだった。

新しい福祉のコンセプトを ブータンへ

佛子園は日本の福祉施設のイメージを変えてきた。小松市にある「西園寺」もそう。400年もの間、地域から愛されてきたが、住職が亡くなり廃寺に。それを佛子園が温泉を併設した福祉施設として08年に生まれ変わらせた。

中に入ると、地元のおばあちゃんがブータンからの研修員、ウォンモさんとこやかにおしゃべり中。夕方までのデイケアサービスを終え、帰るところだ。車いすに乗った障害のある利用者も一緒に時間を過ごしていた。そこに、地域の人々や子どもたちが

続々と入ってくる。「毎日この温泉に來てるよ。最高だよ」「ブータンでしよ、知ってる知ってる。ウォンモさんと仲良しだからね」。そう言いながら、みんな笑顔を見せてくれた。温泉に浸かり、境内を生かしたカフェでお風呂上がりの一杯を楽しむ。ここは福祉施設であると同時に、地域の人々の憩いの場なのだ。

ウォンモさんは、デイケアサービスを利用する障害者やお年寄りの世話をしたり、カフェで配膳を手伝いながら地域の人々と交流し、佛子園のユニークな取り組みを学んでいる。「私にとって全てが新しいこと。ブータンに持って帰りたいアイデアがたくさんあります」と意気込む。タラヤナ財団では新しいコンセプトの福祉施設を計画しており、ウォンモさんらはその中心になつていく人材なのだ。

その上で参考になるのが、佛子園が今年オープンさせた「シェア金沢」。お年寄りや障害のある子どもたち、学生などが共に暮らし、温泉や屋内型運動場、共同売店、ドッグランなどがあり、地域の人々も自然と集まる。まさにソーシャルインクルージョンを体現した理想の街だ。

PLVS VLTTRA。これはラテン語で「さらに彼方へ」を意味する佛子園の基本理念だ。常に新しい福祉を目指して挑戦し続ける姿勢が、ブータンの人々全てを包む社会へもつながるはずだ。



日本海倶楽部のレストランで接客を学ぶゲデンさん(左)。佛子園が運営する3カ所の施設で研修中だ



[右]ウォンモさんらは食事の提供など、どんな福祉サービスを実施しているか、実際に経験しながら学ぶ
[左]住宅や店舗、温泉などが「ごちゃ混ぜ」に設置され、人と人のふれあいが生まれるようにつくられた「シェア金沢」

